

松 山 大 学 論 集  
第 30 卷 第 6 号 抜 刷  
2 0 1 9 年 2 月 発 行

松山大学生に対する学生支援の  
在り方に関する研究

—— 大学生活不安に着目して ——

門	屋	貴	久
清	宮	孝	文
阿	部	征	大

# 松山大学生に対する学生支援の 在り方に関する研究

—— 大学生活不安に着目して ——

門	屋	貴	久*
清	宮	孝	文**
阿	部	征	大***

## I. 緒 言

平成 28 年に文部科学省中央教育審議会大学分科会大学教育部会は、「先行きの予測が困難な複雑で変化の激しい現在の社会において、個人の充実した人生と社会の持続的発展を実現するためには、一人一人がこれまで以上に自らの能力を磨き、高めていくことが不可欠である。そのための鍵として特に重要なのは大学教育である」<sup>1)</sup>とし、「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の3つのポリシーの策定及び運用に関するガイドラインを示した。これは日本のこれまでの大学教育の在り方について問われているということであり、大学教育の質的転換を図るための施策であると言える。

今後の大学教育の在り方については、平成 12 年に文部科学省が「大学における学生生活の充実方策について (報告) - 学生の立場に立った大学づくりを

---

\* 松山大学  
\*\* 日本体育大学大学院  
\*\*\* 日本体育大学

目指して－」<sup>2)</sup>の中で、「『教員中心の大学』から『学生中心の大学』への視点の転換」と「正課外教育の積極的な捉え直し」の2点を示している。「『教員中心の大学』から『学生中心の大学』への視点の転換」については、「これまで、大学の教員の関心は、主として自らの研究に向けられ、学生の教育に対する責任を十分に意識していないということがしばしば指摘されてきたが、今後は、総体として教員の研究に重点を置く『教員中心の大学』から、多様な学生に対するきめ細かな教育・指導に重点を置く『学生中心の大学』へと、視点の転換を図ることが重要である」<sup>2)</sup>とし、「正課外教育の積極的な捉え直し」については、「大学に入学している学生が多様化し、心の問題を抱える学生が増えている中で、これからの大学では、学生に豊かな知識を教授するのみならず、教職員が学生との人間的なふれあいを通じ、切磋琢磨しながら、道德観、責任感などの高い倫理性とともに、忍耐力、意思伝達力、折衝力、決断力、適応力、行動力、協調性など、複雑化し、価値観が多様化した社会の中で生き抜くための基本的な能力の涵養に努めていくことが求められる。そのためには、正課教育や正課外教育の中で、学生が社会との接点を持つ機会を多く与えたり、また、学生の自主的な活動を支援するなど、各大学がそれぞれの理念や教育目標を踏まえ、個性化や多様化を進める中で適切に取り組んでいくことが期待される。その際、従来、正課教育を補完するものとして考えられてきた正課外教育の意義を捉え直し、その在り方について積極的に見直す必要がある」<sup>2)</sup>としている。また、谷田川（2012）が「学生が社会に貢献する人材となり得る高い付加価値を身につけて卒業できるように、『大学中心』から『学生中心』の考え方への転換の提言がなされた。これ以降、正課としての大学教育を潤滑に遂行するための補助的活動というこれまでの厚生補導の理念を脱却し、より大学が積極的に学生にかかわる『学生支援』へと移行する」<sup>3)</sup>と述べていることから、現代の大学における学生支援は、正課教育だけでなく、就職やクラブ・サークル活動、心理相談などの課外教育にも目が向けられ、「大学中心」から「学生中心」へと転換していると言える。

しかし、現在、学生の多様化に伴い、「学生中心」の大学教育の困難さが大学全体の課題となっている。谷田川（2012）は学生の多様化について、「各大学とも学生の確保に必死にならざるを得ず、多様な入試方法で入学者への門戸を開いた。その結果、学力的にもこれまで大学に進学しなかった層が大学に入学するようになり、大学生の質の変化や学力低下、中途問題などが浮上した」<sup>3)</sup>と述べる一方、福田（2007）は「一昔前なら18～22歳は立派な成人だったが、今はそうはいえない、発達上、青年期という思春期と成人期の中間で微妙な時期になる。以前は、より年少に出るとされた問題（不登校や家庭内暴力、発達障害、抜毛症、チックなど）が大学生でも当たり前に見られる」<sup>4)</sup>と大学生の発育の遅れを指摘している。

このような現状の中、大学生活にうまく適応できず、退学してしまう学生も少なくない。読売新聞取材班の調査（2009）によると、4年間のうちに退学した学生の割合は8.2%であったが、中には退学率が40%を超える大学も存在することが明らかとなっている<sup>5)</sup>。大学生の退学については、川崎ら（2014）が「本人が退学の意味を大学に伝える時点で大学側が説得をはじめても本人の意思はすでに固まっていることが多かった」<sup>6)</sup>ことを示し、中島（2012）が「大学適応に学校側の支援を必要とする学生は増加しているものの、現代の学生に共通するような支援だけでなく、大学や個人によって異なる背景に即した形での支援も同時に行っていく必要に迫られている」<sup>7)</sup>と指摘していることから、学生が退学を決断する前の対応が重要であり、その対応は学生一人一人の状況に即したものでなくてはならないため、学生の現状を正確に把握し、状況に応じた適切な学生支援が必要となる。

大学生の現状を把握するための方法の一つとして、藤井（1998）は大学生の不安感を数値化するために大学生活不安尺度<sup>8)</sup>を作成した。この尺度を用いた数多くの研究は、様々な視点から大学生活における不安感を分析しており、大学生の大学生活における不安感を早期に発見するために効果的な手法の一つとされている。

藤井（1998）はこの尺度を用いて調査を実施し、「女子学生の方が男子学生よりも不安を強く感じており、学年が上がり大学生活に馴染めば馴染むほど一般に下がる」<sup>8)</sup> というように、学生の不安感における性差と学年間の差を明らかにした。しかし一方で、徳田（2005）と野中ら（2013）の研究では、大学生活における不安に性差は見られなかった<sup>9)・10)</sup> また、大石ら（2007）の研究によって、3・4年生よりも1・2年生の方が不安は強いこと、部活動所属群の方が不安は強いことが明らかにされている<sup>11)</sup> これらの調査結果から、大学や学部・学科、学年、部活加入の有無、または地域等によっても学生の不安感には差異があることが推測される。

藤井（1998）が「現在行われ始めている『大学革命』には当の大学生の声が十分に反映されているとはいえないので、まず大学生が大学のみならず日常生活においてどのような不安を多く感じているのかを大学教官自らが知り、それをもとに改善していく姿勢こそが今まさに問われてきている」<sup>8)</sup> と述べ、さらに大学生の不安感から生じる「『不登校』の問題は、小、中学校の『登校拒否』の問題に比べて注目されていないが、現実是非常に深刻な状況であるといわざるをえない。本尺度を用いて現実をまず把握し早めに対処しておかないと、この種の問題はますます解決するのが難しくなってくる」<sup>8)</sup> としていることから、各大学が大学生の感じている不安の状況を知ることが、まず大学生の大学不適応や退学等の課題に対し向き合うための第一歩であり、学生の抱える問題の解決、そして学生自身の充実した人生と社会の持続的発展を実現するためにも重要であると考えられる。

そこで本研究は、松山大学生（以下：本学学生）における不安感の特徴や傾向、属性による差異などを藤井（1998）の大学生活不安尺度<sup>8)</sup> を用いて明らかにし、本学学生に対する支援の一助とすることを目的とする。

## Ⅱ. 研究 方 法

本研究は、集合調査法を用いて質問紙調査を行い、分析には IBM SPSS

Statistics 24 を用いた。

## 1. 調査対象者

調査対象者は、本学学生の大学生活への不安感を明らかにするため、松山大学の学生とした。また、学年をランダムに選定するため、「身体運動学」「体育（教職）」等の講義を受講している学生を対象とした。回収数は 237 名、有効回答数は 225 枚（94.9%）であった。

## 2. 調査の時期及び内容

本調査は、日本体育大学ヒトを対象とした実験等に関する規程に基づき、説明書、同意書、審査申請・研究計画書を提出し、倫理審査委員会の承認（承認番号：第 014-H43 号）を受け、2018 年 7 月に実施した。調査内容は、以下の通りである。

### (1) 対象者の属性に関する設問

対象者の属性に関する設問については、性別（2 選択肢）、学年（5 選択肢）、学部（5 選択肢）、入学形式（5 選択肢）、第一希望の有無（2 選択肢）、住居形態（4 選択肢）、居場所の有無（2 選択肢）の計 7 設問を設定した。

### (2) 大学生活の不安に関する設問

大学生活の不安に関する設問については、藤井（1998）の「大学生活不安尺度」<sup>8)</sup>（2 件法・計 30 設問）を用いた。

## 3. 分析方法

### (1) 単純集計

調査により得られた結果について、「調査対象者の属性」、「大学生活不安尺度」<sup>8)</sup>について単純集計を行った。また、「大学生活不安尺度」30 項目を不安の割合が高い項目から順位付けを行った。

## (2) クロス集計

学年間の差異を示すため、学生生活不安尺度得点（平均値）と学年、不安の割合上位（8位まで）と学年についてそれぞれクロス集計を行った。

## (3) t検定

属性別に大学生生活不安要因を明らかにするため、各属性の比較を行った。属性の分析は、①「男性」と「女性」、②「本学が第一希望である群」と「本学が第一希望でない群」、③「居場所がある群」と「居場所がない群」である。

(4) 大学生生活不安尺度<sup>8)</sup>

大学生生活不安尺度は、藤井（1998）が大学生生活全般における不安の測定を目的として作成したものである。この尺度は3つの下位尺度に分かれ、①大学の日常生活に対する不安感（日常生活不安）②大学における単位や試験に対する不安感（評価不安）③不登校や中退といった就学上の問題を生じさせる大学不適応感（大学不適応）となっている。尺度の測定方法は、30点満点で点数を算出し、点数が高い者ほど不安が強いことになる。表1は、清宮（2015）が大学生生活不安尺度の項目において省略名称を示したものである<sup>12)</sup>が、本研究でもこの省略名称を使用する。

表1 大学生生活不安尺度（省略名称表）

大学生生活不安尺度（項目）	大学生生活不安尺度（省略名称）
1. 大学で人が自分のことをどう思っているのか、気になります。	公的自己意識
2. 4年間で卒業できるかどうか、不安です。	卒業
3. 留年したらどうしようと、気になります。	留年
4. 万一事故に遭ったり、病気をしたらどうしようと心配になることがあります。	事故・病気
5. 友達と一緒に何かしなければならぬとき、うまく協力できるか不安な気持ちになります。	友達
6. 部活やサークルで先輩たちとうまくつき合えるか心配です。	先輩
7. 1時間目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安です。	1限の授業への出席

8. 何らかの団体に突然勧誘されないか、不安です。	団体への勧誘
9. 先生が近くにいると気になって仕方ありません。	先生との距離
10. 1ヶ月の生活費が足りるかどうか、心配です。	1ヶ月の生活費
11. 授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがあります。	授業理解
12. 大学の先生と話をするときは、とても緊張します。	先生との会話
13. 先生に「研究室まで来るように」と呼ばれたら何を言われるかとても気になります。	先生からの呼出
14. 将来、良い会社に就職できるかどうか、不安です。	就 職
15. 授業中に何かをしなければならないとき、へまをするのではないかと不安になることがあります。	授業中のへま
16. 必須科目の成績がD（不可）だったらどうしようと心配になることがあります。	必須科目の単位
17. テスト中に時間が残り少なくなると、自分の考えがまとまらなくなります。	テスト(時間不足)
18. テストを受けていて、わからない問題に出合ったとき、頭の中が真っ白になってしまうことがあります。	テスト(解答不可)
19. 成績のことが気になって仕方ありません。	成 績
20. 大学の成績のことを考えると、憂鬱です。	成績による憂鬱
21. 申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配です。	授業単位
22. テスト中、緊張して自分の力が発揮できません。	テスト（緊張）
23. 授業で発表するとき、声が震えることがあります。	授業（緊張）
24. 卒業論文がうまく書けるかどうか、不安です。	卒業論文
25. テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配になります。	テスト（結果）
26. こんな大学にいたら自分がダメになるのではないかと憂鬱な気分になることがあります。	大学への不自信
27. この大学にいて、何か不安な気持ちになります。	大学への不安
28. できることなら、転学あるいは転部したくて仕方ありません。	転学・転部
29. 入学した学部が自分にあっていないような気がして不安です。	学部不適応
30. 大学を退学したいと思うことがあります。	退 学



### Ⅲ. 結 果

表2は、調査対象者の属性をまとめたものである。性別に関しては、「男性」74.2%、「女性」25.8%、学年については、「1年生」49.8%、「2年生」24.0%、「3年生」11.1%、「4年生」14.2%、学部については、「経済」45.3%、「経営」17.8%、「人文」8.4%、「法学」28.4%、入学形態は、「スポーツ推薦」6.2%、「一般入試」57.8%、「指定校推薦」23.1%、「一般公募推薦」10.7%、「その他」2.2%の割合であった。また、本学入学が第一希望であるかについては、「はい」44.0%、「いいえ」56.0%、住居形態は、「自宅」44.9%、「1人暮らし」52.4%、「学生寮」1.3%、「親戚の家」1.3%、大学内における居場所の有無については、「はい」88.9%、「いいえ」11.1%という結果であった。

表2 調査対象者の基本的属性

			n = 225	
			度数	%
性 別	男性		167	74.2
	女性		58	25.8
学 年	1年生		112	49.8
	2年生		54	24.0
	3年生		25	11.1
	4年生		32	14.2
	N. A		2	0.9
学 部	経済学部		102	45.3
	経営学部		40	17.8
	人文学部		19	8.4
	法学部		64	28.4
入学形態	スポーツ推薦		14	6.2
	一般入試		130	57.8
	指定校推薦		52	23.1
	一般公募推薦		24	10.7
	その他		5	2.2
第一希望	はい		99	44.0
	いいえ		126	56.0

住居形態	自宅	101	44.9
	1人暮らし	118	52.4
	学生寮	3	1.3
	親戚の家	3	1.3
居場所の有無	はい	200	88.9
	いいえ	25	11.1

表3は、大学生生活不安尺度30項目を不安の割合が高い項目から順位付けを行った結果である。大学生生活不安尺度の項目において不安の割合が高かった順位（上位8位）は上から、「授業単位」74.7%、「就職」72.0%、「必須科目の単位」68.4%、「テスト（結果）」65.3%、「留年」62.7%、「先生からの呼出」62.7%、「卒業論文」60.4%、「成績」57.3%であった。

表3 大学生生活不安尺度（項目別）

順位	項 目	不安	不安でない
1	授業単位	74.7	25.3
2	就職	72.0	28.0
3	必須科目の単位	68.4	31.6
4	テスト（結果）	65.3	34.7
5	留年	62.7	37.3
5	先生からの呼出	62.7	37.3
7	卒業論文	60.4	39.6
8	成績	57.3	42.7
9	事故・病気	56.0	44.0
9	成績による憂鬱	56.0	44.0
11	卒業	55.1	44.9
12	公的自己意識	54.2	45.8
13	1限の授業への出席	49.3	50.7
14	授業中のへま	45.3	54.7
15	授業理解	44.4	55.6
15	テスト（回答不可）	44.4	55.6
17	テスト（時間不足）	41.8	58.2
18	授業（緊張）	40.9	59.1
19	友達	33.8	66.2
20	先輩	32.9	67.1
21	先生との会話	32.0	68.0
22	1ヶ月の生活費	30.7	69.3

23	大学への不信任	24.9	75.1
24	テスト（緊張）	23.1	76.9
25	先生との距離	22.2	77.8
25	学部不適応	22.2	77.8
27	大学への不安	21.8	78.2
28	退学	18.2	81.8
29	転学・転部	16.9	83.1
30	団体への勧誘	16.4	83.6

※数値は％表記

表4は、学生生活不安尺度得点の平均値の結果である。「尺度全体」13.06, 「日常生活不安」6.24, 「評価不安」5.78, 「大学不適応」1.04 という結果であった。

表4 尺度得点

項 目	M	SD
尺度全体	13.06	7.23
日常生活不安	6.24	3.52
評価不安	5.78	3.26
大学不適応	1.04	1.54

表5は、学生生活不安尺度得点と学年をクロス集計した結果である。「尺度全体」の値は「1年生」13.46, 「2年生」13.54, 「3年生」11.92, 「4年生」11.50, となっており, 「日常生活不安」と「評価不安」については「1年生」が最も高く, 「大学不適応」については「2年生」が最も高い値であった。

表5 大學生生活不安尺度と学年でのクロス集計

	1年生		2年生		3年生		4年生	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
尺度全体	13.46	6.90	13.54	8.03	11.92	5.77	11.50	8.13
日常生活不安	6.55	3.28	6.20	3.91	6.00	3.01	5.31	4.00
評価不安	6.01	3.19	5.80	3.37	5.36	3.41	5.19	3.31
大学不適応	0.90	1.45	1.54	1.80	0.56	0.96	1.00	1.63

表6は、学生生活不安尺度の「授業単位」と学年をクロス集計した結果である。「授業単位」についての不安は、「1年生」が79.5%と最も高く、次いで「2年生」75.9%、「4年生」71.9%、「3年生」56.0%という結果であった。

表6 「授業単位」と学年のクロス集計

項目	1年生		2年生		3年生		4年生	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
は い	89	79.5	41	75.9	14	56.0	23	71.9
いいえ	23	20.5	13	24.1	11	44.0	9	28.1
合計	112	100.0	54	100.0	25	100.0	32	100.0

表7は、学生生活不安尺度の「就職」と学年をクロス集計した結果である。「就職」についての不安は、「1年生」が78.6%と最も高く、次いで「2年生」72.2%、「3年生」72.0%、「4年生」53.1%という結果であった。

表7 「就職」と学年のクロス集計

項目	1年生		2年生		3年生		4年生	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
は い	88	78.6	39	72.2	18	72.0	17	53.1
いいえ	24	21.4	15	27.8	7	28.0	15	46.9
合計	112	100.0	54	100.0	25	100.0	32	100.0

表8は、学生生活不安尺度の「必須科目の単位」と学年をクロス集計で表した結果である。「必須科目の授業」についての不安は、「1年生」が72.3%と最も高く、次いで「2年生」68.5%、「3年生」68.0%、「4年生」53.1%という結果であった。

表8 「必須科目の単位」と学年のクロス集計

項目	1年生		2年生		3年生		4年生	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
は い	81	72.3	37	68.5	17	68.0	17	53.1
いいえ	31	27.7	17	31.5	8	32.0	15	46.9
合計	112	100.0	54	100.0	25	100.0	32	100.0

表9は、学生生活不安尺度の「テスト（結果）」と学年をクロス集計した結果である。「テスト（結果）」についての不安は、「1年生」が71.4%と最も高く、次いで「2年生」66.7%、「4年生」53.1%、「3年生」52.0%という結果であった。

表9 「テスト（結果）」と学年のクロス集計

項目	1年生		2年生		3年生		4年生	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
は い	80	71.4	36	66.7	13	52.0	17	53.1
いいえ	32	28.6	18	33.3	12	48.0	15	46.9
合計	112	100.0	54	100.0	25	100.0	32	100.0

表10は、学生生活不安尺度の「留年」と学年をクロス集計した結果である。「留年」についての不安は、「1年生」が70.5%と最も高く、次いで「4年生」56.3%、「2年生」53.7%、「3年生」52.0%という結果であった。

表10 「留年」と学年のクロス集計

項目	1年生		2年生		3年生		4年生	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
は い	79	70.5	29	53.7	13	52.0	18	56.3
いいえ	33	29.5	25	46.3	12	48.0	14	43.7
合計	112	100.0	54	100.0	25	100.0	32	100.0

表 11 は、学生生活不安尺度の「先生からの呼出」と学年をクロス集計した結果である。「先生からの呼出」についての不安は、「3 年生」が 68.0%と最も高く、次いで「1 年生」65.2%,「2 年生」61.1%,「3 年生」50.0%という結果であった。

表 11 「先生からの呼出」と学年のクロス集計

項目	1 年生		2 年生		3 年生		4 年生	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
は い	73	65.2	33	61.1	17	68.0	16	50.0
いいえ	39	34.8	21	38.9	8	32.0	16	50.0
合計	112	100.0	54	100.0	25	100.0	32	100.0

表 12 は、学生生活不安尺度の「卒業論文」と学年をクロス集計した結果である。「卒業論文」についての不安は、「2 年生」が 64.8%と最も高く、次いで「3 年生」64.0%,「1 年生」62.5%,「4 年生」46.9%という結果であった。

表 12 「卒業論文」と学年のクロス集計

項目	1 年生		2 年生		3 年生		4 年生	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
は い	70	62.5	35	64.8	16	64.0	15	46.9
いいえ	42	37.5	19	35.2	9	36.0	17	53.1
合計	112	100.0	54	100.0	25	100.0	32	100.0

表 13 は、学生生活不安尺度の「成績」と学年をクロス集計した結果である。「成績」についての不安は、「1 年生」が 61.6%と最も高く、次いで「2 年生」61.1%,「3 年生」48.0%,「4 年生」40.6%という結果であった。

表 13 「成績」と学年のクロス集計

項目	1 年生		2 年生		3 年生		4 年生	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
は い	69	61.6	33	61.1	12	48.0	13	40.6
いいえ	43	38.4	21	38.9	13	52.0	19	59.4
合計	112	100.0	54	100.0	25	100.0	32	100.0

表 14 は、学生生活不安尺度と学部をクロス集計した結果である。「尺度全体」の値は「経済学部」13.37,「経営学部」12.75,「人文学部」13.68,「法学部」12.58 となっており,「日常生活不安」,「評価不安」については「人文学部」が最も高く,「大学不適応」については「法学部」が最も高い値であった。

表 14 大学生生活不安尺度と学部のクロス集計

	経済学部		経営学部		人文学部		法学部	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
尺度全体	13.37	7.42	12.75	6.88	13.68	6.19	12.58	7.54
日常生活不安	6.36	3.62	6.08	3.40	6.47	3.04	6.09	3.62
評価不安	5.92	3.41	5.85	3.19	6.21	2.76	5.38	3.22
大学不適応	1.09	1.60	0.83	1.34	1.00	1.49	1.11	1.59

表 15 は、学生生活不安尺度と入学形式をクロス集計した結果である。「尺度全体」の値は「スポーツ推薦」12.57,「一般入試」13.49,「指定校推薦」13.83,「一般公募推薦」11.04,「その他」5.00 となっており,「日常生活不安」については「一般入試」,「評価不安」については「指定校推薦」,「大学不適応」については「スポーツ推薦」が最も高い値であった。

表 15 大学生生活不安尺度と入学形式のクロス集計

	スポーツ推薦		一般入試		指定校推薦		一般公募推薦		その他	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
尺度全体	12.57	8.36	13.49	7.18	13.83	7.85	11.04	4.46	5.00	4.58
日常生活不安	5.93	3.56	6.55	3.46	6.54	3.90	4.96	2.35	2.40	2.70
評価不安	5.36	3.75	5.82	3.24	6.25	3.40	5.42	2.67	2.60	2.07
大学不適応	1.29	1.82	1.12	1.58	1.04	1.64	0.67	0.92	0.00	0.00

表 16 は、大学生生活不安尺度項目を調査等対象者の性別において比較した結果である。「大学不適応」( $t = 2.49$ ,  $df = 156$ ,  $p < .05$ )において「男性」が「女性」より有意に高い値を示した。

表 16 大学生生活不安尺度の性別における比較

	男性 (n=167)		女性 (n=58)		t 値
	M	SD	M	SD	
尺度全体	13.06	7.64	13.07	5.98	0.01
日常生活不安	6.20	3.70	6.38	2.97	0.38
評価不安	5.70	3.40	6.00	2.83	0.66
大学不適応	1.16	1.66	0.69	1.06	2.49*

\* $p < .05$

表 17 は、大学生生活不安尺度項目を「本学が第一希望である群 (はい)」と「本学が第一希望でない群 (いいえ)」で比較した結果である。「大学不適応」( $t = 2.04$ ,  $df = 219$ ,  $p < .05$ )において「本学が第一希望でない群 (いいえ)」が「本学が第一希望である群 (はい)」より有意に高い値を示した。

表 17 大学生生活不安尺度の第一希望の有無における比較

	はい (n=99)		いいえ (n=126)		t 値
	M	SD	M	SD	
尺度全体	12.34	7.49	13.63	7.00	1.32
日常生活不安	5.85	3.60	6.56	3.44	1.50
評価不安	5.69	3.39	5.85	3.17	0.37
大学不適応	0.81	1.43	1.22	1.60	2.04*

\* $p < .05$

表 18 は、大学生生活不安尺度項目を「居場所がある群 (はい)」と「居場所がない群 (いいえ)」で比較した結果である。「大学不適応」( $t = 2.80$ ,  $df = 223$ ,  $p < .01$ )において「居場所がない群 (いいえ)」が「居場所がある群 (はい)」より有意に高い値を示した。



表 18 大学生生活不安尺度の居場所の有無における比較

	はい (n=200)		いいえ (n=25)		t 値
	M	SD	M	SD	
尺度全体	12.90	7.09	14.40	8.35	0.98
日常生活不安	6.21	3.50	6.56	3.69	0.48
評価不安	5.75	3.18	6.00	3.93	0.36
大学不適応	0.94	1.52	1.84	1.46	2.80**

\*\*p &lt; .01

## Ⅳ. 考 察

本研究は、本学学生の不安感を藤井（1998）の大学生生活不安尺度<sup>8)</sup>を用いて明らかにし、本学学生の不安感の特徴や傾向、属性による差異などから本学学生に対する支援の一助とすることを目的とした。

本調査の結果から本学学生の傾向を見ていくと、全体の大学生生活不安尺度の平均値が 13.06 であり、藤井（1998）の大学生生活不安尺度<sup>8)</sup>を用いて調査が行われた他の研究と比較しても高い数値であった。たとえば、清宮ら（2015）が体育系大学生を対象に行った調査<sup>12)</sup>では全体の大学生生活不安尺度の平均値が 10.15、田中ら（2007）が教育学部の学生を対象に行った調査<sup>13)</sup>では全体の大学生生活不安尺度の平均値が 11.35 であり、藤井（1998）が関東の大学 10 校（国立大学 5 校、私立大学 5 校）の学生を対象に行った調査<sup>8)</sup>では全体の大学生生活不安尺度の平均値が 9.17 であったことから、本学学生の大学生生活不安が他大学学生に比べ高い傾向にあることが明らかになった。

藤井（1998）の作成した大学生生活不安尺度<sup>8)</sup>は、「日常生活不安」、「評価不安」、「大学不適応」の 3 つの下位尺度で構成されており、この 3 つの下位尺度について大石（2007）は、『日常生活不安』は、大学内での人間関係、授業についてゆけるか、生活費が足りるか、将来就職が決まるか、留年しないか、などの項目からなる。『評価不安』は、主として授業の成績や単位の取得、卒業論文などに関する不安をさす。『大学不適応』は、在学している大学が自分に

合わない、その大学をやめたい、その大学においては自分がだめになる、などの項目から構成されている」と示している。

本学学生の3つの下位尺度の平均値を見てみると、「日常生活不安」6.24, 「評価不安」5.78, 「大学不適応」1.04であり、田中ら(2007)が教育学部の学生を対象に行った調査<sup>12)</sup>では「日常生活不安」5.39, 「評価不安」5.11, 「大学不適応」0.85, 藤井(1998)が関東の大学10校(国立大学5校, 私立大学5校)の学生を対象に行った調査<sup>8)</sup>では「日常生活不安」3.98, 「評価不安」4.26, 「大学不適応」0.94であったことから、本学学生の大学生生活不安尺度数が高い傾向は、下位尺度の一部に偏りがあるのではなく各項目ともに高い傾向にあると言える。これについては、本調査の調査対象者の属性が一つの要因として考えられる。

大石(2007)は全学年を対象に調査をし、「大学生生活不安尺度の3つの下位尺度全体を通して、1・2年生よりも3・4年生の得点の低さが顕著であった。とりわけ1年生の得点の高さ、4年生の得点の低さが目立った。このような結果になった理由として、年月を経て学生が大学生生活に適応してゆくことと、大学生生活に適応できない学生は途中で退学してしまうことが考えられる」<sup>11)</sup>としていることから、調査対象者の約半数が1年生であった本調査において全体的に不安感が高い傾向を示した可能性がある。

また、本学学生が抱える大学生生活不安尺度の項目を詳細に見ていくと、「授業単位」74.7が最も高く、次いで「就職」72.0, 「必須科目の単位」68.4, 「テスト(結果)」65.3, 「留年」62.7となり、上位項目には「学業」に関する項目が多いことが分かる。

藤井(1998)<sup>8)</sup>や鈴木(2016)<sup>14)</sup>の調査によると、最も不安感が高い項目は「卒業論文」であったが、本学学生においては「卒業論文」よりも「授業単位」, 「必須科目の単位」, 「テスト(結果)」など「学業」に関する項目が高い傾向にあった。これについても、調査対象者の学年が重要な要素であり、大学全体の傾向と特徴を目的としランダムに学生を選定した本調査では、1・2年生の占

める割合が高かったため、「卒業論文」に関する不安が、他の調査に比べて低い傾向であった可能性が考えられる。実際に学年別で比較すると2・3年生においては「卒業論文」が高い数値を示しているが、本調査では対象者数が限られているため推測の域を出ない。今後は調査対象者における学年の比率を考えた調査を実施し、学年別の傾向をより詳細に把握する必要がある。

一方、「学業」に対する不安については、藤井(1998)が「大学生は日常生活における様々な不安より学生の本分である学業に対する不安をより強く感じている」<sup>8)</sup>と述べているように、ある意味至極当然の結果とも言える。だが、大石(2007)の調査<sup>11)</sup>における1年生と2年生の結果を高い項目から見えていくと、「卒業論文」、「就職」、「先生からの呼出」の順であり、「授業単位」は9番目、「必須科目の単位」は4番目、「テスト(結果)」は1年生が7番目、2年生が6番目であったことから、本学学生における「学業」に対する不安が高い傾向は、本学学生の特徴であると推測される。

さらに、本学学生の大学生生活不安尺度における項目を性別において比較すると、「大学生生活不安」全体においては有意な差が見受けられなかったが、「大学不適應」の因子において男性が女性より有意に高い傾向が示された。清宮(2015)の調査では、「男女で大学生生活不安尺度と各因子で比較したところ、大学生生活( $t=2.10$ ,  $df=542$ ,  $p<.05$ )と学習( $t=3.62$ ,  $df=542$ ,  $p<.001$ ), 人間関係( $t=2.76$ ,  $df=542$ ,  $p<.01$ )において、男子学生よりも女子学生の方が有意に高い値を示した。この結果から、女子学生は『大学生生活』、『学習』、『人間関係』に対して男子学生よりも不安を感じていることが明らかになった。また、体育系大学生の中では、平均値で見ても全体的に女子学生が男子学生よりも不安度合いが高い傾向にあり、女子学生へのサポートについて今後考えていかなければならない」<sup>13)</sup>と女子学生の不安感が男子学生より高く、特に女子学生への支援の構築が重要であるとしており、本学学生も「大学不適應」以外の項目の平均値では男性より女性が高く、先行研究と同じ結果であるのに対し「大学不適應」の因子において女性より男性が有意に高い傾向が示さ

れたことは、本学学生の特徴と考えられる。他にも、「大学不適応」因子において有意な差が示された属性として、「本学が第一希望である群」と「本学が第一希望でない群」、「居場所がある群」と「居場所がない群」が挙げられる。

「本学が第一希望である群」と「本学が第一希望でない群」の比較においては、「本学が第一希望でない群」が「本学が第一希望である群」に比べ「大学不適応」について有意に高い値を示し、属性の割合を見ても「本学が第一希望である群」44.0%、「本学が第一希望でない群」56.0%とわずかではあるが「本学が第一希望でない群」が多いことが分かる。森（2013）が「志望の大学に入学できず、学習意欲を失ってしまったいわゆる不本意入学者への対応は深刻である」<sup>15)</sup>と述べているように本学においても「本学が第一希望でない群」の学生に対する支援の強化の必要性が窺える。支援の強化策の一つとしては、見館ら（2008）が公立大学の学生に行った調査<sup>16)</sup>から「学習意欲」や「大学生活の満足度」に対して、「友人とのコミュニケーション」はほとんど影響を与えず、影響を与えるのは「教員とのコミュニケーション」であるということを明らかにしていることから、「教員とのコミュニケーション」のさらなる充実が挙げられる。「教員とのコミュニケーション」については、講義等もとよりゼミナール活動やオフィスアワー、その他の様々な状況において教員が学生と有意義なコミュニケーションを図ることが重要であり、その重要性を大学教員が再度理解し、実践していくことが学生の「学習意欲」や「大学生活の満足度」の向上につながると考えられる。また、そういったコミュニケーションが、学生に目標や将来プランを明確にイメージさせるきっかけとなり得るものと思われる。

そして、「居場所がある群」と「居場所がない群」については、「居場所がない群」が「居場所がある群」に比べて「大学不適応」について有意に高い値を示した。

「居場所」については、萩原（1997）が『『私』とひと・もの・こととの相互規定的な意味と価値と方向の生成によってもたらされる『私』という位置であ

る」<sup>17)</sup>と示し、西中（2014）が「居場所とは、対人関係を中心に据えた概念といえる」<sup>18)</sup>と述べているように、人との関係性を前提とし生成されるものである。

1992年に文部科学省が不登校に関する報告書<sup>19)</sup>の中で、学校は自己の存在感を実感でき精神的に安心していることのできる「心の居場所」としての役割を果たすことが求められると、学校が「心の居場所」の役割を果たすことの必要性を提唱した。また、石本（2009）の調査では「朝日新聞紙面での『居場所』や『居場所がない』といった表現の使用頻度の推移をみると1994年までと1995年以降との間で大きな上昇が見られる」<sup>20)</sup>ということから、1995年以降、学校での「居場所」が注目され始めた。

糸原ら（2011）は、居場所感と大学生活不安の関わりについて「大学において居場所感を有していない学生は、大学に居場所感を有している学生よりも、大学生活における不安を高く感じている」<sup>21)</sup>と述べ、大学での「居場所」の欠如が大学生活不安に繋がることを明らかにしている。また、阿部（2011）は社会学の視点から「居場所」について「人が生きていくための『いのちづな』」<sup>22)</sup>と示し、中西（2005）が「居場所」は人の生死にさえ影響を与える<sup>23)</sup>と述べていることから、「居場所」の欠如は命にも関わるため、「居場所」を有していない学生に対する支援は極めて重要であると言える。

本調査の結果から、本学学生の傾向として全体的に不安感が高く、特に「学業」に対する不安が高いこと、そして属性による比較から「大学不適應」について「男性」、「本学が第一希望でない群」、「居場所がない群」が有意に高い値であることが明らかとなった。先にも述べたが、「大学不適應」とは、在学している大学が自分に合わない、その大学をやめたい、その大学にいては自分がだめになるなどといった要素であるため、このような状況の学生は退学、不登校等につながる可能性がある。したがって、このような現状を教職員が再度認識し、学生に対する支援を継続的に意識する必要がある。

学生に対する支援と大学生活不安の関わりについて、福井（2007）は「大学

生活における不安には家族よりも教員のサポートが重要である」<sup>24)</sup>とし、「ソーシャル・サポートは期待されたほどの緩和効果はなく、唯一教員からの支援が高い者は評価不安や大学不適応の得点が抑えられていることが明らかとなった」<sup>24)</sup>と示していることから、学生の「学業」における不安や「大学不適応」に対し、教員からの積極的かつ直接的な支援が効果的であり、大学生の大学生活不安を抑えることにつながると考えられることから、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」へと移行している現状において、大学教員が学生の状況を詳細に把握し、積極的に支援を行うことが今後さらに求められる。

## V. 今後の課題

本研究は、藤井（1998）の大学生活不安尺度<sup>8)</sup>を用いて、本学学生を対象に調査を実施し、本学学生の傾向や特徴を明らかにしたが、今後の課題として以下のことが挙げられる。

- (1) 調査対象者の選定について、学年、性別等の比率を均等にして調査する必要がある。
- (2) 今回は全体の傾向や特徴を調査したが、今後はさらに詳細な調査（個人を対象にした調査等）を実施し、より個人に寄り添った学生支援を考えていかなければならない。
- (3) 今回の調査を継続的に実施し、学生の多様化や時代の変化に対応していかなければならない。

## 謝 辞

本研究の調査等の遂行にあたり、アンケート調査に協力頂きました被験者の皆様には、心より感謝申し上げます。

## 引用参考文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会大学分科会大学教育部会（2016）「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）

及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/koudai/detail/1397732.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1397732.htm)

- 2) 文部科学省 (2000)「大学における学生生活の充実方策について (報告)－学生の立場に立った大学づくりを目指して－」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm)

- 3) 谷田川ルミ (2012) 戦後日本の大学におけるキャリア支援の歴史的展開. 名古屋高等教育研究, 12 : 166-168.
- 4) 福田真也 (2007) 大学教職員のための大学生のこころのケア・ガイドブック 精神科と学生相談からの15章. 金剛出版 : 東京, 12.
- 5) 読売新聞教育取材班 (2009) 教育ルネサンス大学の實力. 中央公論新社 : 東京, 323.
- 6) 川崎孝明・中嶋弘二・川崎健太郎・川口恵子 (2014) 大学における寄り添い型学生支援体制の構築－中途退学防止の観点からの実践的アプローチ－. 尚絅大学研究紀要人文・社会科学編, 46 : 76.
- 7) 中島絵美 (2012) 時代や大学の特色に応じた学生相談の取り組みの検討－大学生不適應の予防的アプローチ－. こども教育宝仙大学紀要, 3 : 132.
- 8) 藤井義久 (1998) 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 68 (6) : 441-448.
- 9) 徳田完二 (2005) 学生期ライフサイクルからみた学生の不安－4年制大学生と短期大学生の違いについて－. 人間福祉学研究, 8 : 179-188.
- 10) 野中優実・山田浩平 (2013) 大学生のユーモアと大学生活不安との関連. 愛知教育大学保健環境センター紀要, 12 : 45-52.
- 11) 大石千歳・浅見美弥子・奥野知加・渡辺博之・若山章信・今丸好一郎・中本哲 (2007) 東京女子体育大学学生のライフスタイルと健康に関する調査報告 その2－精神的健康に関する基礎調査－. 女子体育研究所所報, 1 : 23-48.
- 12) 清宮孝文・依田充代・門屋貴久 (2015) 体育系大学生の大学生活不安に関する研究. 日本体育大学紀要, 45(1) : 27-37.
- 13) 田中存・菅千索 (2007) 大学生活不安に関する心理学からのアプローチ. 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 57 : 15-22.
- 14) 鈴木慶子 (2016) 大学生活に関する意識調査－スポーツ系コースに所属する学生を対象に－. 駿河台大学論叢, 53 : 153-159.
- 15) 森朋子 (2013)「初年次セミナー導入時の授業デザイン」初年次教育学会編初年次教育の現状と未来. 世界思想社, 165-166.
- 16) 見館好隆・永井正洋・北澤武・上野淳 (2008) 大学生の学習意欲, 大学生生活の満足度を規定する要因について. 日本教育工学会論文誌, 32(2) : 189-196.
- 17) 萩原建次郎 (1997) 若者にとって「居場所」の意味. 日本社会教育学会紀要, 33 : 42.

- 18) 西中華子（2014）居場所づくりの現状と課題．神戸大学発達・臨床心理学研究，13：7．
- 19) 文部科学省（1992）登校拒否問題への対応について  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/net19920924001/t19920924001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/net19920924001/t19920924001.html)
- 20) 石本雄真（2009）居場所概念の普及およびその研究と課題．神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，3(1)：93.
- 21) 桑原民子・社浦竜太（2011）大学生における居場所感と大学生活不安に関する研究－学生相談室の利用の有無に注目して－．ものづくり大学紀要，2：65.
- 22) 阿部真大（2011）居場所の社会学－生きづらさを越えて－．日本経済新聞出版社，東京都：93.
- 23) 中西新太郎（2005）ポジションどり文化の生きづらさを越えて．生活指導，47(8)：42.
- 24) 福井義一・青野明子（2007）大学生活において環境要因と個人内要因が大学生活不安や抑うつ，状態不安に与える影響について．国際研究論叢，20(3)：50.